第12回連続講座

『いのち』を考える

悲しむ人にやさしく寄り添う

① 10月11日(火)

柏木 哲夫

淀川キリスト教病院理事長

悲しみを支え、悲しみに寄りそう

悲しみを支えることと、悲しみに寄りそうことには差があります。支えるは下からであり、寄りそうは横からです。支えるためには技術力が必要であり、寄りそうためには人間力が必要です。必要な人間力について詳しく述べてみたいと思います。

② 10月18日(火)

髙木 慶子

上智大学グリーフケア研究所
特任所長

愛と悲嘆

人は、愛する方と死別した後、深い悲嘆を経験しますが、その悲嘆は、故人との関係性にあると思います。その人に対する愛が深ければ深い程、悲嘆は深くなります。悲嘆は、故人に対する愛情の証しではないか、と考えています。

③ 10月25日(火)

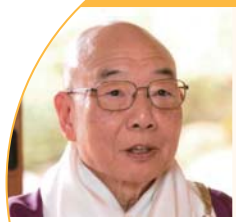
小林 玖仁男

国登録有形文化財「二木屋」
主人

あの世に逝く力
～悔いなく自分の人生を完結させるために～

ある日、病が発見され余命宣告を受けました。当事者として「死」を見つめると、健康な方が対岸から思っている「死」とは違う、本当のことが分かってきました。人は、人生で一度だけ死ぬチャンスがあります。悔いなく閉じるためには、前向きに明るく「死」を考える講演です。

④ 11月1日(火)



森 清範

清水寺貫主

いのちは仏なり

応仁の乱直後の京の町は焼け、人を喪い衣食住ままならない悲嘆の中にありました。そのような大変な状況下で、町の人々は寄進し合って梵鐘を鋳造し、清水寺に納めました。なぜ、悲嘆や不自由な生活のなかにあって梵鐘を作ったのでしょうか。そこから命や仏さまについて考えてみたいと思います。

⑤ 11月8日(火)

沼口 諭

医療法人徳養会 沼口医院 理事長
(真宗大谷派僧侶)

医療がささえる命、宗教が向き合ういのち
～在宅医療チームに臨床宗教師を迎えて～

超高齢社会を迎え、医療の現場はこれまでの病院中心の医療から施設を含めた在宅医療を中心とした地域包括システムにシフトしつつあります。そのような生活に近い現場で活動している在宅医療チームに臨床宗教師が加わった『いのちのケア』についてお話ししたいと思います。

⑥ 11月15日(火)

清水 俊彦

東京女子医科大学脳神経外科
客員教授

悲嘆と頭痛

人に理解されない頭痛の悩みは、時に悲嘆の原因となるのです。しかし極端に悲しい出来事の後に激しい頭痛に襲われ、寝込んでしまうこともあるのです。このような悲嘆に伴う頭痛の原因とは何か。またどのように対処していけばよいか。皆さんと考えていこうと思います。

※都合により急遽講演内容等を変更する場合があります。

(敬称略)